

vol.41

人工知能が神ならば……

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

人工知能が人類存亡の鍵を握っているとかいわれる。産業界では用途別の開発と投資がさかんで、汎用型人工知能による人類淘汰というディストピア的発想とは一線を画したいようだ。現実が小説家の予言通りになったとしても、小説家の責任ではないが、かつて私はこんな小説を書いた。

支配層が「大淘汰」のために引き起こした戦争と人工ウイルスの蔓延によって文明はリセットされ、人口がかつての半分に減っていた。大淘汰の後に出現したのは、AIが全知全能の絶対神として君臨する社会だった。労働、生産活動のほとんどはAIに委ねられ、生き残った人間は少数の貴族と平民に分断された。貴族は荘園のような場所で学術、芸術、スポーツ、賭博などを楽しみ、表現言論活動や恋愛、生殖、愚行、蕩尽、決闘、戦争など特権的に認められた数々の自由を謳歌していた。絶対多数の平民も労働や養育、学習、思考から解放され、日々を遊んで暮らすことができたが、貴族と較べると、

自由はかなり制限されていた。

平民は「神の子羊」と呼ばれ、実質、家畜化されており、「牧場」と呼ばれる居住区に収容され、配給の食料で飼育される。平民は誕生から成長、繁殖、死まで一貫してAIの管理下に置かれ、六十歳に設定された標準寿命に達すると、安楽死させられる。貴族になるか、平民になるかはゲノムの塩基配列によって決まる。特定の条件を満たしたゲノムの持ち主だけが選別され、貴族になる。具体的には、病気因子になる遺伝子がないこと、知能、容貌、特殊能力など突出した資質が備わっていることが条件となる。

ただ、その世界にも逃げ道はあり、貴族、平民のいずれにもならない選択として、野生化する者もある。荘園からも牧場からも放逐され、野鳥や猪、鹿と同じように原野や山林を駆け巡る生活になる。狩猟採集や農耕をしながらの過酷なサバイバル・ライフを自分の意志で選択する者も少数ながらいる。私もそうだ。支配を拒み、野生化に向かうのは、人間の本能に忠実な選択であり、何処にでも逃げる自由だけは手放したくない。

Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授